

ジェンダー概念の意義と効果

上野千鶴子

1 セックスとジェンダー

ジェンダーという概念はセックスと区別するために、60年代ごろからストラーラ [Stoller 1968=1973] によって使用され、70年代以降女性学・ジェンダー研究者によって広く採用され定着した。

ジェンダー概念が必要とされたのは、生物学的カテゴリーとしてのセックスと社会的文化的カテゴリーとしてのジェンダーとが非常に異なるからである。よく知られているように、生物学的カテゴリーとしてのセックスは、遺伝子(のなかの性染色体)、内分泌(性腺ホルモン)、内性器、外性器、脳、第二性徴、性行動の重層によって生じる複合的な現象である。以上の各水準における生物学的性差には、①両極のあいだに連続性があり、②各水準のあいだの対応関係には蓋然性が認められ、③したがって一致している場合もあれば不一致の場合もある。それらの知見をもたらしたのは、ほかならぬ生物学的性差研究であった [加藤1998]。

他方、社会的文化的カテゴリーとしてのジェンダーは、知られている限り厳格な性別二元制のもとにあり、連続性や中間項を排除する性格があることがわかっている。ジェンダーの社会的文化的認知は、通常新生児の外性器の外見による男女の識別に始まり(DNA鑑定ではなく)、言語習得とともに性別自認の形成を伴い、社会的文化的に学習された性別役割への社会化を通

じて成立する。このような性別二元制規範をジェンダー秩序、それをもとにつくりあげられた社会システムを、ジェンダー体制と呼ぶ [Connel 1987=1993; 江原2001]。ジェンダーにも性自認、性心理、性役割、性的指向等の異なる水準があり、生物学的性差と同じく、そのあいだには①連続性、②蓋然性、③したがって一致と不一致がある。経験的に知られるジェンダー現象とは、生物学的性差の諸次元を含む重層的・複合的な現象であるのに対して、カテゴリーとしてのジェンダーはそうではない [上野2002]。

以上のようなセックスの連続性・蓋然性とジェンダーの不連続性・決定性とのあいだには、当然のように乖離がある。社会的文化的なカテゴリーとしてのジェンダーは論理的には排中律(Aでなければ非A)を伴う、中間項を排除した二項対立概念である。歴史的には「第3の性」と呼ばれる集団が一部の社会に観察されることがあるが、それらのいくつかの例も、知られる限り男性集団のうちで一部の「女性化した(された)男性」に対して与えられる集団カテゴリーであって、性別二元制を崩すものではない。

2 言語カテゴリーとしてのジェンダー

ところで社会的文化的カテゴリーは必ず言語を伴っている。というより、カテゴリーとは言

語的カテゴリーのことであり、人間は言語を欠いてはカテゴリー認知ができない。動物のなかで、二重分節をともなう言語体系(断片的なシグナルではなく)を持つのは人間だけである。ジェンダーは言語カテゴリーであり、言語についての科学があきらかにしたことからジェンダーにもあてはまる。その点では、生物学的カテゴリーであるセックスも例外ではない。

20世紀の学問のうちで他の諸科学にもっとも大きな影響を与えたのは、言語学であると言ってよい。ここでいう言語学とはソシュール[Saussure 1909=1971]以降の構造言語学のことだが、言語学は諸科学の基礎となる科学認識論に対して「言語論的転回」と呼ばれるパラダイム転換をもたらした。ジェンダー概念もこの言語論的転回の影響下にある。構造言語学の発見とは①言語記号と記号対象物との非関与(したがって記号と記号対象物との関連の恣意性・蓋然性)、②記号の価値の示差性である。言語記号が互いの間の差異によってのみ価値(記号の意味)を生じるとする知見からは、言語カテゴリーとしてのジェンダーが二項対立、それも言語学にいう欠性対立によって成り立っていることが導かれる。欠性対立とは一方の項が無標、他方の項が有標によって成り立つ非対称な二項対立であり、無標の項は「有標でない」という否定形によってしか定義されない。Man/Womanの二項はこの欠性対立に該当している。このようなカテゴリーの非対称性は、



PROFILE

上野千鶴子
(うへの ちづこ 1948年生)
日本学術会議第一部会員、東京
大学大学院人文社会系研究科教
授
専門：社会学、ジェンダー研究

規範的な価値と結びついて、優劣や上下関係のような権力や資源の格差をもたらす。

言語学はまた構造(Langue)と実践(parole)についての新たな知見をもたらした。文法と呼ばれる構造規則があらかじめ頭の中に存在するから人は言語を発することができるのではない。構造とは、どこにあるかを指し示すことができないヴァーチャルな存在であり、ただ発話の実践によってその時・その場で再生産されることを通じて、どのようなものかを判定できないにすぎない。同じように、ジェンダーはあらかじめ個人の中に実体として存在するから現象として発現するわけではない。個人個人の日々の実践のなかでジェンダーが反復的に遂行されることを通じて事後的に再生産されるのである。わかりやすい例をあげれば「おまえ、男だろ、しっかりしろ」とか「キミ、女の子だから早く帰ったほうがいいよ」という発話行為やふるまいをつうじて、その時・その場でジェンダーは遂行され、ジェンダー体制は再生産されている。人々の実践のなかにはジェンダー秩序に従うものもあれば、それから逸脱するものもある。ジェンダー実践の多様性は、経験世界のな

かでは周知のとおりである。

今日における学知としてのジェンダー概念は、言語論的転回以降、ポスト構造主義の20世紀における科学認識論の影響を受けている。これに「身体的差異に意味を付与する知」という簡潔な定義を与えたのは歴史家のジョアン・スコット [Scott 1988=1988] である。すなわちジェンダーとは、外性器に象徴される生殖機能に焦点化して人間集団を二項に非対称的に差異化する言語的認知カテゴリーであり、ジェンダーの「区別」が社会的公正に反するとされるのは、カテゴリーの非対称性に価値規範上の「差別」が結びついているからである。ここで言う知とは、フーコー [Foucault 1976=1986] によれば「真理とは何か」を指示する権力であり、中立的なものではない。同じことは「人種」カテゴリーの構築にも言える。DNAの99%以上が共通しているにもかかわらず、「皮膚の色」に焦点化して事後的に「身体的差異に意味を付与する知」が「人種」概念を構築したことは、今日ではよく知られた事実である。

クリスチーナ・デルフィ [Delphy 1989=1989] はスコットを受けてジェンダーを「非対称的な差異化実践」、すなわち男女という二つの項に与えられたカテゴリーではなく、二項を生産する実践を指すカテゴリーだとする。したがってジェンダーの動詞的用法、たとえば「ジェンダー化された職場」とか「国民国家をジェンダー化する」という言い方が可能になる [上野1998]。

同じくポスト構造主義者でジェンダー概念に影響を与えた理論家にジュディス・バトラー [Butler 1990=1999] がいるが、よく引用される彼女の「セックスはジェンダーだ」もしくは「ジェンダーがセックスに先行する」という表現は、以上の言語学的知見からは容易に理解されるであろう。これらは「セックスはジェンダーという言語カテゴリーを介してのみ認知される」という、言語学にとっては常識にあたる命題を言っているにすぎない。すなわち、セックスという生物学的性差も、ジェンダーと同じく言語的なカテゴリーであり、社会的文化的な認知から独立したものではない。生物学的性差を研究対象とする人々も、個体を二つの集団に分類しその一方を「オス」と他方を「メス」と命名するとか、そのなかから逸脱例を発見するとかの認知的操作には言語カテゴリーを用いている。

バトラーはさらに性別自認 (ジェンダー・アイデンティティ) を「ジェンダーの差異化実践の反復的遂行の効果としての沈殿物」と定義し、ジェンダー同一性とは遂行的実践の結果であり、原因ではないと言う。「女は女に生まれるのではない、女になるのだ」とボーヴォワールが言うように、「女らしく」ふるまいつづけることをつうじて女は「女になる」、すなわち女としての社会的認知とジェンダー同一性を獲得する。男についても同じことが言える。

3 性別自認と性同一性の不一致

性別自認、別名ジェンダー同一性は以上のよう
に言語的、すなわち社会的文化的なものであり、
したがって人間に固有である。ジェンダー
体制は、排他的なジェンダー二元制と、両性の
間に成り立つべきとされる異性愛規範から成り
立っている。現実にはジェンダー同一性には多
様性があり、性別自認、性的指向、性的行動、
性同一性のあいだには一致・不一致、ずれやね
じれがある。これまでの性差心理学は、異性愛
規範のもとでのジェンダー二元制への排他的同
一化のみを性的主体化と解し、それに適合しな
い個体を逸脱として病理化する傾向があった。
フロイト心理学がその典型である。フロイト理
論によれば、父-母-子から成るエディプスの三
角形のもとで、男とは父に同一化した者を、女
とは母に同一化した者を指す。(その点ではフロ
イト理論は生物学的決定論ではない。)さらにリ
ビドー・カセクス(持ちたい欲望)と同一化
(なりたい欲望)の対象を性別に分離することに
成功した者だけを性的成熟に達したとし、両者
の混同(男として性別同一化を果たしながら、
男を性的欲望の対象とする者、つまり同性愛者)
を「異常」や「倒錯」として病理化してきた。

新しいジェンダー学は、理論的にも実証的に
もセックスとジェンダーとのあいだの関連の多
様性に目を向けようとする。たとえばポスト・
エイズ時代の大規模な科学的疫学調査の一つで
あるアメリカの国民健康社会生活調査

[Michel, Gagnon, Lauman & Kolta 1994=
1996]では、同性愛を定義するのに性別自認に
加えて、性的指向、性的行動、性同一性の三つ
の変数の組み合わせから合計8通りの類型を作
る。たとえば男性としての性別自認を持った個
人が、同じ男性に性的指向をもって男性との性
行為を実践しながら、同性愛者だという性同一
性を持たないケース、男性への性的指向を持
ち、同性愛者だと自覚しながらこれまで一度も
同性愛行為を実践したことがないケースなど、
「同性愛」カテゴリーにも多様性があり、このな
かのどこに境界を引くかは、文脈によって変わ
る。

近年ジェンダー研究とともにセクシュアリテ
ィ研究は大幅にその知見を蓄積してきた。人間
の性現象(セクシュアリティ)が生物学的に決
定されるという見方は、現実の多様性によって
じゅうぶんに反証されている。セックスとジェ
ンダーの不一致の例には、同性愛、両性愛、ト
ランスベスタイト(異性装)、トランスジェン
ダー、トランスセクシュアル、インターセック
ス等がある。これらは「逸脱」「異常」と病理化
されてきたが、近年になってこれらを脱病理化
する動きが出てきた。たとえば同性愛は1973年
にアメリカで精神病のリストからはずされた。
これらが「逸脱」であり「病理」であれば、「治
療」と「矯正」の対象となるが、脱病理化され
ればその必要はない。だが、この間には両義性
があり、これまでの研究でも、同性愛や性転換(症)
が生まれながらに脳で決定されているという説

や自覚的に選択されたとする説など、諸説がある。

トランスジェンダーは一般に「身体の性と心の性の不一致」と解されるが、この研究の進展は、ジェンダー概念にとって大きな示唆をもたらした。自分の身体的性別に違和感を覚えることを「性別不快感候群」と呼ぶが、そのうち身体的性別と一致しない性別自認を持つ者をトランスジェンダーと呼ぶ。そのなかで自分の性別認知を変更したいと思う者をトランスセクシュアル(性転換者)、さらに性別変更にとまって身体変形を望む者をトランスセクシュアリズム(性転換症)と呼ぶ用語法が定着しつつある。これらをまとめて性同一性障害と呼ぶが、性同一性障害はほんとうに「障害」なのだろうか? 以上の定義はいずれも性別自認と性同一性(どちらも主観的)との不一致をめぐる、完全に主観的なものである。病理化は、ホルモンや外科的処置による性器再構築手術を保険の適用対象である「治療」と見なすために当事者らによって積極的に採用されることもあるが、心理的な徴候が「病」として認識されるためには、当事者がそれに苦しみ、そこから脱することを「治療」として自ら求めるという契機がなければならない。だが、彼らにとって性別自認や性同一性のずれや不一致が「混乱」「苦痛」として認識されるのは、もっぱら排他的なジェンダー二元制のもとに彼らが適合しないからであって、彼らの側に原因があるからではない。

トランスジェンダー研究は始まったばかりで

あり、まだまだ知られないことは多いが、今までの研究からわかっていることがいくつかある[中村2005; 佐倉2006]。①一つは性別自認が身体の性から独立していることである。②性的指向もまた性別自認から独立しており、③それらのあいだには、セックスとジェンダー、セクシュアリティを含む複雑で重層的な関係があり、何が決定因かについては単純に言えない。そのうえ、④性別自認そのものが一回的・不可逆的に成立し、その後は一生をつうじて変更がないかどうか、実はよくわかっていない。

以上を通じてもたらされた知見は、人間のジェンダー現象には多様性、連続性、非決定性があり、ジェンダー二元制はそれに対して抑圧的に働くという事実である。

4 ジェンダー概念の効果

このようなジェンダー概念を学術の分野に持ち込むことでどのような効果もたらされたであろうか。フェミニズムの影響とともに学問の分野では70年代に女性学が成立したが、それが80年代にジェンダー研究へと転換するにあたって研究領域は格段に拡大し、アプローチは女性という「項」から性別という「関係」へ、さらに女性領域というローカル(局地的)から学際横断的にあらゆる分野へジェンダーという分析カテゴリーを導入するユニバーサルなものに変わった。すなわち女性のいる領域については女性の研究を、女性のいない領域については女性の

不在の説明を求める研究が成立した。また男性学の名のもとに男性性の社会文化的構築を探求する研究も生まれた。ジェンダー学はこれまでの研究に新規な主題をつけくわえるにとどまらず、これまでの研究のジェンダー・バイアスを問い、学問の組み替えを要求した。たとえば初期のジェンダー研究にリンダ・ノックリンの「なぜ女性の大芸術家はあらわれないのか？」という有名な論文があるが、彼女はこのなかで女性の手仕事が「芸術」の定義から組織的に排除されており、「芸術」や「芸術家」の定義が男性中心にできあがっているために、この問いは同義反復であること、この問いが真に成り立つためには「芸術」の定義を変更する必要を論じる。

同じような学問の組み替えへの要求は、他の分野でも起きている。ジェンダー史はジェンダー概念の導入によって歴史の書き換えを要求したし、そのためにルネサンスの評価が変わるなど、古代／中世／近世／近代のどの分野でも新しい歴史の見方が次々に登場している[Wakita, Bouchy & Ueno, 1999]。ジェンダー統計は、ジェンダーに敏感な統計データを要請し、ジェンダー経済学は「不払い労働」を労働概念に取り込むことで、労働時間についてのまったく新しいジェンダー統計を生み出している[上野1995；大沢1993]。ジェンダー法学は自由主義的な個人のジェンダーバイアスを問い、ジェンダーに敏感な法理論を探求している。これまでのところジェンダー概念の影響力は人文社会系の学問分野に限られていたが、最

近では性差医療や災害とジェンダーのような科学技術系および文理融合の分野においてもジェンダー概念の効果が認められてきている。

ジェンダー研究を阻むのは学問分野のジェンダー・バイアスばかりではない。何が研究の主題として適切で価値があるかという学問のアジェンダ設定そのものにジェンダー・バイアスがある。つまり天下国家のような公的なことがらが家族のような私的なことがらより価値があり、政治や経済のようなマクロな現象の方が私生活や感情のようなミクロの領域より研究に値する、という学問それ自体に内在するジェンダー秩序である。

ジェンダー学は、あきらかにジェンダーの偏りがあるとわかる対象ばかりでなく、一見中立的・客観的に見えるさまざまな領域のなかにも、隠されたジェンダー非対称性があることを明らかにしてきた。すなわち差異があると思われるところでは差異を相対化し、差異がないと思われているところに差異を発見するという理論的なツールとして、ジェンダーという概念は強力な効果を発揮してきた。

ジェンダー学はよく誤解されるように、差異を否認しているわけではない。さまざまな差異がそのままのすがたで承認され、差別の根拠とならないことをめざしている。第18期日本学術会議の副会長を務めた社会学者、吉田民人氏[2001]の用語を借りれば、認知／評価／設計という情報処理過程に対応して、学問にも認知科学／評価科学／設計科学の三つの機能があ

る。ジェンダー学はよりいっそうの「ジェンダー公正」な社会をめざす点で、認知／評価のみならず設計科学でもある。

20世紀の科学技術が人類にもたらした功罪両面を考えると、学問は何を、何の目的で、誰のために、明らかにしたいのか？という原点に立ち返るべきであろう。それが「人間のための科学」、大沢真理氏の言葉を借りれば「エンドユーザー（最終利用者）志向」な科学への道である。その点では自然科学もまた例外ではない。それが学術に対して社会から負託された使命であろう。ジェンダー学はそれを強く意識した学問研究である。

参考文献

- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble*. New York & London: Routledge. =1999竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社
- Connell, R. J., 1987, *Gender and Power: Society, the Person, and Social Politics*. London: Polity press. =1993森重雄他訳『ジェンダーと権力—セクシュアリティの政治学』三交社
- Delphy, Christine, 1989, *Sexe et genre*, in *Global Perspectives on Changing Sex-Role*. National Women's Education Center. =1989「セックスとジェンダー」『性役割を変える—地球的視点から』国立婦人教育会館
- 江原由美子 2001『ジェンダー秩序』勁草書房
- Foucault, Michel, 1976, *L'Histoire de la sexualité*, tome I. Paris: Editions Gallimard. =1986渡辺守章訳『性の歴史』1巻、新潮社
- 加藤秀一 1998『性現象論』勁草書房
- Michel, Gagnon, Lauman & Kolta, 1994, *Sex in America: A Definitive Survey*. New York: Little, Brown & Co. =1996近藤隆文他訳『セックス・イン・アメリカ』NHK出版
- 中村美亜 2005『心に性別はあるのか？』医療文化社
- 小倉千加子 2001『セクシュアリティの心理学』有斐閣
- 大沢真理 1993『企業中心社会を超えて—現代日本をくジェンダー—で読む』時事通信社
- 佐倉智美2006『性同一性障害の社会学』現代書館
- Saussure, Ferdinand de, 1909, *Cours de linguistique générale*, ed. par Godel. Genève: R. Genève. =1971山内貴美男訳『言語学序説』勁草書房
- Scott, Joan W., 1988, *Gender and the Politics of History*. New York: Columbia University Press. =1992荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社
- Stoller, Robert, J., 1968, *Sex and Gender: the Development of Masculinity and Femininity*. Jason Aronson Publishers. =1973桑畑勇吉訳『性と性別—男らしさと女らしさの発達について』岩崎学術出版社
- 上野千鶴子 1995「労働概念のジェンダー化」脇田晴子・S. ハンレー共編『ジェンダーの日本史』下、東京大学出版会
- 上野千鶴子 1998『ナショナリズムとジェンダー』青土社
- 上野千鶴子 2002『差異の政治学』岩波書店
- 吉田民人 2001「新しい学術大系の必要性と可能性」『学術の動向』2001年12月号、日本学術会議
- Wakita, Haruko, Anne Bouchy & Chizuko Ueno, eds., 1999, *Gender and Japanese History*, Vol. 1 & 2. Osaka: Osaka University Press.